

# 自然をめぐる 労働論からの民俗学批評

A Review of Folklore from the Standpoint of "Labor in Nature"

菅 豊

①問題の所在

②柳田国男にとっての生業と労働論

③柳田以後の生業と労働論

④現代の生業と労働論

⑤結論

【論文要旨】

柳田国男は、民俗学における生業・労働研究を狭隘にし、その魅力を減少させた。それは、民俗学の成立事情と大きく関わっている。その後、民俗学を継承した研究者にも同様の研究のあり方が、少なからず継承される。しかし、1980年代末から90年代にかけて、新しい視点と方法をもって、旧来の狭い生業・労働研究の超克が模索された。この模索は、「生態民俗学」、「民俗自然誌」、「環境民俗学」という三つの大きな潮流に区分できる。

「生態民俗学」は、野本寛一により提唱された。それは、便宜的な項目やテーマが実態視されるようになって、研究分野として拡散してしまった従来の民俗誌（民俗報告書）の枠組みを壊すものとして評価される。それは、自然を軸として、民俗事象相互の関係や、その連続性のダイナミズムに関心を払いながら再統合することにより、本来の民俗誌のあるべき姿へと回復させる。

「民俗自然誌」は、篠原徹により提唱された。それは、従来の民俗学が前提として認めてきた伝承母体（集団）から、個人へ視点を転換させるものとして評価される。それは、従来の民俗学が頻繁に採用してきた、文化の深層や基層、あるいはエトノスへと安易に繋げる歴史還元主義に利用されてきた伝承を、現在理解の素材としての伝承へと実質的に回帰させる。

「環境民俗学」は、鳥越皓之により提唱された。それは、民俗学自体に拘泥されない脱領域的な研究手法から、生活者の立場に立って実践を行う点において評価される。それは、民俗学が初発に保持していたはずの経世済民の思想に、民俗学を回帰させる役割を果たす。

これら三つの研究の潮流は、生業や労働の理論や方法に関して、1990年以前のものよりも、圧倒的に質的な妥当性を保持している。